

熊本・福岡・佐賀

### 新たに3県とUターン協定

専修大学は新たに熊本、福岡、佐賀の3県とUターン・イターンに関する就職支援協定を結んだ。12月1日現在で本学と協定を結んでいるのは、13県1市になった。

11月15日、福岡県庁であった締結式に佐々木重人学長が出席。小川洋知事らが出席。小川知事は「若者が地方で就職すれば地方の活性化につながる」と歓迎。佐々木学長は「協定を通じ、Uターン・イターンにも対応し、定額給付金(12月1日)

### 12県市が参加

地方自治体や、地方の優良企業が集い、就職支援や採用状況などを説明するUターンフェアが、12月8、9の両日、専大サテライトキャンパスで初めて開催された。

東日本の12県市が参加。Uターンを希望する学生が熱心に耳を傾けた。就職部の主催。秋田、

### 就職課から

「4年次生へ」就職活動継続中の皆さん、就職課を利用していませんか？  
大手の就職ナビサイトだけを頼っていたり、誰にも相談しないで頑張っている学生は、ぜひ活用ください。

また、学生時代には、宮城県には、自動車関連産業や高度電子機械産業などの分野において、世界的にも有名な大きな企業が多く立地しています。また、高度な技術と輝かしい実績を持ち、



初のUターンフェアで、自治体職員らから説明を受ける学生

石川、茨城、静岡、栃木、長野、新潟、福島、宮城、山形、山梨の各県と札幌市が参加した。

このうち栃木県のブースでは地方銀行など3社が業務内容を説明。県の担当者は全国に先駆けて今年8月に開設した就業アプリを学生に紹介した。また、石川県のブースでは担当者が学生と話を交わして語り合いながら、希望にあう企業を具体的に提示していた。

福島県からは、ゆるキ

日時	講座名	場所
12月19日(月) 16:35~	成長する会社・危ない会社の見分け方	生田525教室
12月21日(水) 11:00~	Uターンフェア	神田571教室
1月10日(火) 16:35~	成長する会社・危ない会社の見分け方	神田731教室
1月12日(木) 12:25~	就職試験で課される筆記試験とは	生田*
1月16日(月) 16:35~	就活前に知って役立つ労働法	生田* 神田731教室
1月17日(火) 16:35~	モノづくり企業職種研究セミナー②	神田731教室
1月31日(火)	第2回就職ガイダンス	生田* 神田*

\*教室はポータルやS-netでお知らせ

「3年次生へ」年が明けると定期試験、就職ガイダンス、2月の業界研究入門、そして3月にはよいよ企業へのエントリーです。いつでも気軽にエントリーしてください。

就職課は皆さんのサポートです。いつでも気軽にエントリーしてください。

## 宮城県知事 村井嘉浩

## 知事 ターン メッセージ



### 地方創生の世に出る学生諸君へ

あの東日本大震災からの施策と一体となって、5年9か月が経過いたしました。宮城県では、次世代に全力で取り組んでいると見据えた地方創生を、具体的な宮城労働局、地方経済の活性化、地方の医師不足解消に向けた37年ぶりの医学部の開校など、復興を促す取り組みを推進してまいります。

また、首脳層に、宮城県のUターンをよりきめ細やかに支援する「みやぎ移住サポートセンター」を運営しています。東京と仙台にそれぞれ相談

【みやぎジョブカフェ】 <http://www.miyagi-jobcafe.jp/pc/>  
【みやぎ移住サポートセンター】 <https://miyagi-ijuguide.jp/supportcenter>

毎日新聞社ビジネス部門に内定を得た谷口幸平さん(文4=写真)に就職活動を聞いた。

## 就職活動を振り返って

### 谷口 幸平さん (文4)

福岡県出身の谷口さんは高校時代、野球部で汗を流した。野球を中心としたスポーツ記事や雑誌全般に紹介する新聞記事に触れ、スポーツジャーナリズムに興味を持った。専大文学部人文・ジャーナリズム学科ジャーナリズムコースに入学。



「新聞、出版などの分野の第一線で活躍してきた先生方からメディアの奥深い世界を学びました」

特に2年次に受講した

## 新聞社の新分野に挑む

「沖縄ジャーナリズム論」では、現地で合宿、地元新聞社などで沖縄戦や基地問題について学び、貴重な体験となった。谷口さんは「取材や情報収集を通して、物事の本質を見極め、正確に報道する大切さを教わられた」と語る。

出版学の植村八潮ゼミに入り、出版を文化と産業の両面から学ぶことでジャーナリズムへの興味

「人間関係の幅が広がりました」とほほえんだ。

谷口さんは高校、大学の7年間、寮生活をしてきた。大学では横浜市の福岡県学生会館に入寮、異なる大学で学ぶ学生たちと寝食を共にすることで

## University Life as a Foreign Culture



As a member of the English Department at Senshu, I often have the duty of being a homeroom teacher (クラス担任) and I remember the first time I was assigned this job. At first, I was shocked because no such position exists in American universities, and I thought it was quite odd. Gradually, however, I came to enjoy this task, and I now find it very rewarding. It was one of the many experiences that I have had in becoming accustomed to living and working in a different culture, and it reminds me of the well-known four stages of adapting to a new culture: the "honeymoon phase," in which everything seems new and exciting; the "anxiety phase," when everything is confusing or frustrating (such as being asked to be a homeroom teacher); the "adaptation phase," in which you learn about and adjust to the new culture; and finally "acceptance," when you relax and become accustomed to the culture. Having experienced this process, and while working closely with freshmen students over the course of a school year, I realized that for them, coming to the university was like entering a new culture, and that they too were experiencing the same process. Therefore, I added a lecture about this process to my orientation materials, and it seems to help the students negotiate their way and adjust to their new university lives a bit more easily. (フリックマン, ジェフリー C. 文学部准教授)